



発行所 青山同窓会 新潟市関屋下川原町二 新潟高校内 発行人 齊藤希式 印刷所 オリオン印刷

就任挨拶

学校長 小野塚忠義



私は、このたび、丸亀校長の後をうけて、本校の校長に就任致しました。二十三代目の校長であります。

明治二十五年、本校が県下初の県立尋常中学校として設立されてより年を閲すること七十四、出たる卒業生二万五千、中等教育機関としての歴史は古く、輩出せる俊秀は、政界、官界、実業界、或

いは教育界、その他あらゆる方面において活躍、顕著な業績をあげたるもの枚挙にいとまならず、かくて、本校の名は、県内は勿論、全国的に赫々たるものがあるであります。

私は、本校の校長たることを本心に光榮に存じます。微力ながら、当に光榮に存じます。微力ながら、

また母校に舞い戻ったのであります。「落ちつくところへ落ちつきましたね」とのご挨拶にささか

困惑するのですが、本校との因縁の深さはしみじみ感じております。願ひに、昭和三十年七月、教

頭の時、火災後の復興建築が始まりました。三十年より四十年教

論、三十年より三十九年教職として勤務、その後他に移り、このたび

私は、本校第三十四回の卒業であり、昭和二十三年より四十年教

現在、本校は、全日制 一五四名、うち女子一七一名で若干の

その心情は充分承服されるので、何とかしてその意思を実現すべく、その方向で学校側と打合せ中な

他の、現在実現を希望されている話題の一つは、昨年の三年生委員会を設けて踏み出す予定で、

一同が今年卒業するに当り、青陵次号には具体案を報告できようとの

その詳細な名簿も作製された。本部所在地である新潟に於ては

既に県庁支部、県教育庁支部、市役所支部があつて年毎に親睦連絡

の事を進めているが、他の多くの職場におかれても、この際、心あ

る有志が率先して支部結成のイニシアチブを執つて下さることを期

待して止まない次第である。今回総会通知と共に会費払込み

その他についてお願いを申し上げたが本会発展の基礎条件として何

分のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

このように青陵問題は、それが近々新編作成の準備を始めた

ので、各クラスの会員の移動に際しては、その判明次第に事務局

へご報告を賜りたい。

長崎高商教授として長崎に移りました。長崎高商は片淵町という丘

の麓のようなところにあり静かな場所でしたが、戦争がだんだん激

しくなつてきていたため、高商の生徒を引連れて長崎造船所へ

軍艦造りの手伝に出掛けたりしました。長崎は気候もよく、人情も

豊かななまなみよいところが好きでしたが、私が長崎へ転任する際、台

湾と内地との海上が敵の潜水艦の出没で危険でしたので、家族を台

北市に残して単身赴任しました。ところが、戦争の様子次第に悪

化して、台北市も慶々大空襲を受けましたので、心ならずも台北師

範学校へ転じて、家族を救出しなければと考えました。この時は、

家族とともに死ぬの覚悟があれば仕方がないという悲壮な覚悟

をしました。台北師範に移つたのは、昭和十九年十二月でしたから、客船は殆

んどなく、私は軍用飛行機で台北市へ飛びました。台北師範に移つ

てからは、いよいよ戦雲は暗くなつて、翌年春には師範生は教官と

一緒に警備召集の令となり、台湾東海岸の警備に当りました。この

警備召集では、昨年逝去された大倉英太郎先生と一緒に働きました。

その後はおさまりの引揚となり昭和二十一年から、故郷の地新潟

で就職することになりました。大雪の年でありましたが、十日町高

女を提出し、柏崎常盤高校長として五年余り、県教育委員会に前

後十二ヶ年程勤務して、最後に新潟高校長を命ぜられた次第であり

ます。ここが私の終点でございます。

私はまだ六十才を出たばかりですから、人生経験などを語るほど

ではないと思いますが、ただ朝鮮、台湾、長崎、新潟というように、

就職地があらちちと移りました。そういうことで、いさかやい経

験になつたと自らを慰めています。いまは寺尾の砂丘地に住んでいま

すから「青山―青山」という生徒たちの応援歌は聞えてきません

が、昨年の青陵祭の頃、屋上に幾

つも集団を成して、なにごとか秘策を練りながら、時折り唱ううた

ごえを公舎でよくききました。今年も元気で唱ったことでしょうか。

私が新潟高校長に就任した際、四月の職員異動で、丸亀校長が

退職されて、三四回卒の同窓小野塚忠義氏が校長として着任された

その他職員間に多数の異動があつた。離任(敬称略)

全日制 退職(明訓高校) 数学主任、勤続二年

外川 弘 中川 保 富地正樹 県指導主事

松木真言 新潟女子短大 通信制 小野昭一 新潟商業高校

和泉誠一 新潟中央高校 新任 全日制 石黒明徳 数 三条東高より

野坂泰司 数 巻高校より 小泉英雄 体 白山高校より

通信制 遠藤良吉 数 白山高校より 小泉 正 体 安塚高校より

上杉雅之 英 新津高校より 阿部誠也 美 若宮中学より

高木睦弘 国 新潟高商より 六十四回卒

元財団法人同仁会東京医院長 (外務省外郭団体の文化事業)

現財団法人同和病院理事長兼院長 現外務省医員(外務省診療所長)

現明治大学健康相談所長 東京青山同窓会幹事長

元新潟日報社社長 元新潟放送社長

元新潟日報社社長 元新潟放送社長

元新潟日報社社長 元新潟放送社長

元新潟日報社社長 元新潟放送社長

元新潟日報社社長 元新潟放送社長

小野塚新校長を迎えて

幹事長 齊藤希式

問題は解決を見ずして、校門を去る。このように青陵問題は、それが近々新編作成の準備を始めた

ので、各クラスの会員の移動に際しては、その判明次第に事務局へご報告を賜りたい。

長崎高商教授として長崎に移りました。長崎高商は片淵町という丘の麓のようなところにあり静かな場所

でしたが、戦争がだんだん激しくなつてきていたため、高商の生徒を引連れて長崎造船所へ軍艦造りの手伝

に出掛けたりしました。長崎は気候もよく、人情も豊かななまなみよいところが好きでしたが、私が長

崎へ転任する際、台湾と内地との海上が敵の潜水艦の出没で危険でしたので、家族を台北市に残して単

身赴任しました。ところが、戦争の様子次第に悪化して、台北市も慶々大空襲を受けましたので、心

ならずも台北師範学校へ転じて、家族を救出しなければと考えました。この時は、家族とともに死ぬの

覚悟があれば仕方がないという悲壮な覚悟をしました。台北師範に移つたのは、昭和十九年十二月

多年の功績に対し叙勲

左記の同窓諸先輩に対し、夫々の方面に益した業績に酬える叙勲並びに授賞がありました。本会としても心からその栄誉を慶祝いたします。

職員移動

- 四月の職員異動で、丸亀校長が退職されて、三四回卒の同窓小野塚忠義氏が校長として着任された。その他職員間に多数の異動があつた。

事務局より

会報を通じて会員の結びつきを強固にするという発刊の趣旨もどうやら達成されつつあることは喜ばしい。会員個々にお届けするようにしたいと思ひながらも、郵送費の関係で意にまかせなかつた。同窓会費徴収の件が総会で決議され、



坂口 献吉 二二回卒



笹川 加津恵 二〇回卒



金子 義晃 二二回卒



鹿野 健 二二回卒

対立 つづく

青陵校名問題

まだ遠い雪どけ

一、トップ会談開かる

●青陵同窓会幹事長より説明 要旨左の如し。

●人権擁護委員会に提訴することを考えている。

●来月初旬トップ会談を開催予定。

●青陵問題対策委員会を来月開催予定。

●二・二八 人権擁護委員会へ提訴 本校代名詞ともいべき青陵名を女子工芸側に校名として使用されたことは本校生及び同窓の受け精神の打撃は甚大なるものがあり人権侵害も甚だしいとして資料持参の上提訴す。

●然し研究はするけれども、問題はむずかしい。法律的根拠はないので解決の緒はないとの返答がある。

●二・四 臨時職員会議

●二・三 三日午後一時半より行われたトップ会議の結果を校長報告要旨次の如し(先方の言い分)

一、校長は本間校長個人で決めたのでなく多くの候補名から理事にかけられて決定したものである。

二、何事があっても圧力によって変更しない。将来何かの機会に変更する必要がある時は自主的に変える。

●二・九 青陵問題対策委員会

●新聞に声明文を掲載

●卒業式の朝

●起草案を早く作成

●三年生が「青陵健児の像」を

寄附

●生徒に青陵問題について飽く迄も青陵名を守る趣旨のことを学校長より話してもらおう。

●青陵旗の作製

●新入生父兄にPR

●青陵問題対策委員会を近く開催

●二・一五 生徒との懇談会

●青陵校名問題について生徒側の意見を聞く

●二・一八 卒業生登校日

●「青陵健児」名の入った茶碗を卒業生全生徒に卒業記念として贈る。

●尚当日臨時職員会議開催、青陵健児の像は小委員会結成の上設立準備に入ることをする。

●二・一九 青陵問題対策委員会

●同窓会としては飽くまでも青陵校名問題が解決されるまで見受けられた。その原因は、もう一年余にわたって不解決が続いている。「青陵問題」にある。在校生の送辞や卒業生の答辞の中にも、「いまだこの問題が未解決なのは心苦しい」といった文句がはびこっている異例なものであった。半年近い空白を破って今月三日、同窓と新瀉青陵高校の代表者間でトップ会談が開かれたが、具体的な案が出ないまま、物別れ、この校名問題はますます深刻化し、感情的対立にまでなってきたようである。

●この起りは一昨年暮れ、私立の新瀉女子工芸高校が、四十年の歴史、青陵精神の力によるものと信じています。

●つづいて三十九年も押しつまつたところ、これもまた私達にとっては全く思いがけなかった問題が起りました。

青陵問題であります。傾きかかった旧体育館で、あるいはまだ復興の完成していないこの体育館でいくつが生徒総会を開きましたか。白熱した議論はつづき、時間の過ぎるのを知りませんでした。街頭署名運動、ビラ配布、各方面への陳情と私達の「青陵」を

守るために、私達は青春の情熱をあげて、この問題の解決に注ぎました。そしてその間に、学園の伝統とは何か、いかにして青陵精神を高め、守るかを真剣に考えました。

友情を誓い団結の誓いを知らず屈の斗志を燃やしつつ、正しい道理の実現がいかにか困難な、かつ勇気のいるものかを教えられ、数多くの貴重な教訓を学びました。ゆきたいと思えます。

然し問題は必ずしも私達の期待した方向に進みませんでした。今この問題を未解決のまま、在校生諸君に託して、なつかしい学び舎を去らねばならないことは私達にとつただ一つの痛恨事であり、私達はこの母校を限りなく愛しています。青陵健児であることに誇りと喜びを感じており、不幸にして青陵という文字はたゞ他に之を唱えるものがあつても青陵健児の心意気だけは何人といえどもこれを奪うことはできません。在校生諸君、私達の意のある所を受けついで更に大きく前進されんことを望んでやみません。私達はこの問題を通して得た貴重な体験を今後の人生に生かし、この問題の行く末を見つめてゆきたいと思えます。

二、新瀉日報紙上に記事掲載さる

●二・二五 青陵校名問題新瀉日報 社会欄に、未解決は残念「青陵」騒動、割り切れぬ卒業生ら、と記事として掲載。もう一度この記事をこゝに載せてみよう。

●県立新瀉高校の卒業式は去る二十二日行われたが、ことしの卒業式は例年とは違つたふいふが見受けられた。その原因は、もう一年余にわたって不解決が続いている。「青陵問題」にある。在校生の送辞や卒業生の答辞の中にも、「いまだこの問題が未解決なのは心苦しい」といった文句がはびこっている異例なものであった。半年近い空白を破って今月三日、同窓と新瀉青陵高校の代表者間でトップ会談が開かれたが、具体的な案が出ないまま、物別れ、この校名問題はますます深刻化し、感情的対立にまでなってきたようである。

●この起りは一昨年暮れ、私立の新瀉女子工芸高校が、四十年の歴史、青陵精神の力によるものと信じています。

●つづいて三十九年も押しつまつたところ、これもまた私達にとっては全く思いがけなかった問題が起りました。

伝統と校風を象徴する代名詞のよきなもので、他校の使用まかりならぬ、と異議を申し立てたことから問題がこじれてきた。

●その後四十年一月十三日、新瀉高校生徒会評議会で問題化、同月十七日健富清一郎同窓会長、本間忠孝、芝高校長(当時)が第一回の会談、双方円満に解決に努力することを申し合せたが、交渉は進展せず、新瀉高側は同窓会、職員会議などで学校全体として改名反対運動に立ち上ることを決議、生徒達は街頭に出てビラ配布、署名集めなどをやった。

●塚田知事もあつてに乗り出すと発言、社会問題となつてきた。これに対して青陵高側は、ずっと静観を続け、新瀉高側の動きに對しても沈黙を守つたまま、現在に至つてゐる。しかし解決が長びくにつれて中傷や悪質なうわさも聞かれる様になり、しだいにドロ沼の様相をおびてきた。

●今月三日商工会議所で新瀉高側から丸亀校長、健富同窓会長、君PTA会長、青陵高側から本間校長、大倉理事らが出席して、両校のトップ会談が開かれたが、青陵

にもなるものでなく、いつそこの際、大乗的な立場に立つて、兄弟校(?)の名のりをあげたなら異議はおどろき、そしてやがて万雷の拍手を惜しまないだろう。

●新瀉異人はそんなにもキモツツが小さいのであろうか、自分と姓名の全く同じ人が、隣家にいたからといって、反対を唱えるいわれはなく、むしろ親しみさえ感ずるの人情ではなからうか。

●以前にも生徒達が「勉強も手につかない」といっているのを読んだあきれたが、教育の場として、

全くの本末転倒であり、はなはだし時間と感情の浪費でもあろうといつても誰からも祝福され喜ばれるものでなければならぬ。学校も同窓の小野塚新校長を本年迎へ新しい気持ちで本問題を取り組もうとしているが何時終るとも知らない青陵校名問題の円満解決が一日も早く到来することを念願して止まない。

松田 一郎

●既に七、八年前より、大運動会を「青陵祭」という名に変えて、青陵健児の年間最大の行事となつている。創立記念日の近くという主旨から、例年は六月下旬に実施しては、梅雨の最中であること、一学期の後半を、おちついて学習に勉めさせたいという方針で、今年五月十五日と決定した。既に四月半ば頃から生徒は、出たもののテーマの選定を話し合つてきた。この青陵祭では、一、二、三年をクラス名でタテ割りにして、一組連合、二組連合、……十組連合と十集団に分ける。青陵祭と名が変ると同時に性格も一変し、単なる運動会ではなく、はなやかな応援、仮装を主にしたショー的なものになつてきて、この青陵祭は新瀉市内のみならず、各方面に有名になり、今年西越高校や西蒲原の青年会の見学者もあつた。今年の各連合のテーマは、一連合は熊祭、二火消、三インカイデリアン、四河童天国、五小坊主、六宇宙物、七クレオパトラ、八アリババと百人の盗賊、九パイキング、十明治百年である。

●開催日の二週間前から応援歌の練習が許され、一週間前から仮装の作品づくりが許される。日頃目立たぬ生徒の中にも、この方面のタレントがいて、応援の動作の振付の指導などが運動場のそここで行われる。仮装の作品づくりには中庭一ぱいに各連合の染色用のドラムカンが設けられ、たき火が始まる。古い敷布を黄色に染めていたのぼれる。クレオパトラの侍女たちの着る円舞、赤い布が空中にヒラヒラする昔のものが泥水にぬれてボトラ、ボトラと腐れなわを振るに似て、悲壮である。しかしこの雨の中で十の集団は、彼等のプログラムを断行した。まことに青陵健児、青陵健女、こゝにありあつて少し風邪ひきの生徒が出たが、仮装で一等になつた四組連合の三年生には一人も欠席者が出なかつたのは不思議である。

●優勝した連合は、いくつかのアパンをもらひ、賞状を教室の壁に掲げて、健闘した青陵祭の思い出を大切にしながら、本来の勉強受験への道をばく進しているようだ。

(本校教諭 青陵祭仮装審判長)

三、土岐教頭、新瀉日報に投書す

●三・一 本校土岐教頭は日報紙上に左記のような投書をなす。

●先日、青陵問題の未解決について本紙に載つた意見は、局外者として公正を期したものと敬意を表す。しかしことは、精神的価値である伝統または愛校心にかなするもので、外部からはその機微をうかがえないのも無理はない。

●青陵は、新瀉高校で五十年前から用いた名であり、大正十一年の中学校校歌は「青陵健児」の語を四節にわたつて返し、新制高校校歌も、名をえらぶ青陵の伝統を丘の上と歌う。もはやこれは単なる代名詞ではなく、伝統、校風を象徴する聖なる名詞なのである。いので将来に待つことにしたいと遺憾の意を表す。

●六・一七 瀬沼茂樹氏文芸講演会 その折、小柳新瀉日報編集局長は、「最近どこかの学校が青陵名を名に使用しては気にするなという方が無理である。よい名ならだが用いてもかまわぬというの荒っぽい議論だ。いかに気に入つた名前だとして、自分の子供のだけかにかれに同じ名をつける親があるか。だればばかりもなく呼べる名であつてこそ個性ある伝統も生まれよう。

●「こゝまで以上」とか、「いままらまた」とかいうが、むしろ

母校の応援団が、予算の不足のため応援旗が欲しくとも、作成できないで困つておつた。

●青陵健児の旗のもとに、各種スポーツ大会で後輩の活躍する姿を見ることは懐しく頼もしいものである。スポーツを通じて人間関係が豊かになり、苦しい練習に耐えて勝ち抜いてゆくところに、人間の根性が養われる。団旗をかざして、力一ぱい、「ああ青陵に精氣あり」「青陵健児、こゝにあり」と歌うとき、生徒の心の中に俺は青陵健児なんだぞという意識が培われ強くなつてゆく。勉強に余念ない生徒も、入賞の戦績に勉強意欲を刺激され、全校の心の団結も強固になつてゆくことであろう。

●他校の応援団が、空高く幾流もの団旗を掲げ、応援の小旗の波の遙らぐのを見ながら、団旗のない応援団にどうして意気の高揚が望まれようか、応援のない選手達も全力発揮が出来ない。青年は意気と魂の触れ合いこそ、教育の神髄である。

●これはどうしても、団旗を作つてやらなければならぬ。同窓会に援助の懇請があつたので、心よく引受けて、応援団旗五流を寄贈することとなつた。(沢山)

さて待望の五月十五日、予報は午前中は小雨、午後は曇り。開会式に校長は「諸君等の熱と意気はこの書を吹きとばせ」と意気正に天を衝くいきおいで始まつたが、天を衝くいきおいで始まつたが、トラック、及びフィールドで各種競技が進むにつれて、降つたり止んだりの雨が、降つたり降つたり止つたり。綱引きの決勝、その他一部の競技を中止して午後は仮装だけ強行することにする。

●降りしきる雨の中で戦やぶれたインデリアンはおお向に地面に倒れ背中が溜りに、腹は雨に打たれる様はベトナムの戦場もかくやと



この写真は、新瀉日報に掲載された土岐教頭の投書に関する記事の一部を示している。背景には、青陵祭の仮装や団旗の描写が散見される。

●二・二五 青陵校名問題新瀉日報 社会欄に、未解決は残念「青陵」騒動、割り切れぬ卒業生ら、と記事として掲載。もう一度この記事をこゝに載せてみよう。

●県立新瀉高校の卒業式は去る二十二日行われたが、ことしの卒業式は例年とは違つたふいふが見受けられた。その原因は、もう一年余にわたって不解決が続いている。「青陵問題」にある。在校生の送辞や卒業生の答辞の中にも、「いまだこの問題が未解決なのは心苦しい」といった文句がはびこっている異例なものであった。半年近い空白を破って今月三日、同窓と新瀉青陵高校の代表者間でトップ会談が開かれたが、具体的な案が出ないまま、物別れ、この校名問題はますます深刻化し、感情的対立にまでなってきたようである。

●この起りは一昨年暮れ、私立の新瀉女子工芸高校が、四十年の歴史、青陵精神の力によるものと信じています。

●つづいて三十九年も押しつまつたところ、これもまた私達にとっては全く思いがけなかった問題が起りました。

源川栄二君の追憶

第九回卒業生 青木得三



大正十四年の源川君

昭和四十年二月九日、青山同窓会報第二号を受取った。三遊亭円歌師匠の想いが写真入りで大きく出ています。源川君は三十二回、私は九回、その間二十二年も隔っているから、私が追憶を書いたのはおかしきようであるが、源川君は新潟中学の投手、私はマネージャー、同じ新潟中学野球部の出身であるから、少しもおかしきことではない。

昭和三十八年の春、東京青山同窓会が新宿の景雲荘で開かれて、各人が自己紹介をした時、私は卒業回数と姓名をいっただけであったが源川君は明治神宮球場長であることをいって一緒に、私が初代東大野球連盟会長に就任したことを報告して下さった。それが私が源川君の声を聞いた最初である。私は遠くを隔て、源川君によりよく願いますといった。

八月二十九日午後、明治記念館で運営委員会が開かれた。念館で運営委員会が開かれた。土肥、片桐尚氏等から反対の討論があった後、私は第二球場改造の問題を当日は議決しないことを正式に提案した。委員の元文部省兼教局長下村寿一君（一高の同輩）が最先に私の提案に反対した。帝人事件の名裁判長藤井五郎君は明治天皇の御製を数首朗読した。私は委員長である明治神宮宮司甘露寺長氏に対し表決を要求し、表決の方法は挙手によることを主張した。委員長は私の提案を容れて、賛成者の挙手を求めた。少数であった。私は心中しめたと思っていた。直ちに私は、改選問題それ自体の表決を要求した。これより先、新たに委員になった東京副知事鈴木俊一君は退席、文部省体育局長前田氏は賛成、反対何れにも挙手しなかった。表決は賛成者過半数で第二球場改造案が可決せられた。私はこれで安心した。直ちに席を立った。前記下村君が席を立てて来て、まだ議案があるからといって私をひきとめたが、私はさかなかつた。晩飯も食わないで午後九時を過ぎた。

果して源川君は私の真の腹を洞察していただろうか。一高時代の同窓下村寿一君でさえも、私の真意を洞察しなかつたのであるから、源川君も或はそうであったかもしれない。源川君が反対もせず賛成もせず、静観してほしいといったにも拘らず、私が反対の急先鋒に立ったからである。しかし私は悪かなものであるけれども、真に反対であるならば、可決せられないのが明白であるのに敢て、委員長に表決を迫るわけがない。前にも述べた様に私と源川君とは年が二十もちがうから、いつか一度私の腹の中を源川君に打ちあけて度いと思つていたので、源川君は私より先に死んでしまった。その罪滅ぼしのために、この原稿を青山同窓会に投ずる。私は今迄、甘露寺宮司、伊達権司、その他神宮関係者に一度もこの話をした事はない。今始めてこれを公けにするのは、新潟中学が源川君と私の共通の母校であるからである。

三遊亭円歌氏の日本落語界に貢献した功績は偉大である。しかし源川君が日本学生野球に貢献した功績はそれにもまさるとも、決して劣ることはない。同窓会諸君が将来若し明治神宮第二球場を観覧することがあるならば、それは東京大学の反対のために最初の計画より小さくはなつたけれども、尚後楽園球場に劣らない立派な球場であるから、どうか故源川君の功績を思い出して下さい。（四十一・二一五）

井上六郎さんの思い出

第二十五回卒業生 星野晃広



筆者

九月一日私は源川君を神宮球場にたずねて、「先日は失礼しました。皆さん立腹しておられたでしょう」というと源川君は何も答えなかつた。実は新潟の友人から、井上さんの事について何か面白い話があったら書いてくれませんか、と依頼を受け、いろいろ追憶を辿つた末、最初は、井上さんが後年新中野球部に史に永く影響する大きな功績を残

にして、今回は筆者の知る井上さんの印象を極力摘んで書いてみることにした。井上さんという人は、学生時代から常に物の考え方の、人に先んじている警抜な頭脳の持ち主であったが、普通よくある例にもれず同級生等からは常に誇大な思想家だとか、大風呂敷だとか、終始陰謀とかが、新中時代の名刺であった。尚井上さんの其頃の姓は牛陽さんといひ、新潟市内一流の菊池屋という旅館の養子になり、若旦那といわれる存在であった。厳父は佐藤莊三郎という漢学者であつて、新潟で筆名として漢学塾を開いておられ、新潟の昔の名士は殆んどその門をくぐらない人は無い位であった。平民宰相原敬さんとも教を乞つて入門し、交換に亀井算を残して行ったという文書が箱入りして保存されてたものであつた。

長兄佐藤莊三郎氏は天下の秀才であり、有名な独学文学者であつた次兄寛次郎氏は証券業界に活躍され、三兄哲三郎氏は洋画師であり、名作が大分新潟に残つて居る筈である。要するに秀才一家であり、従つて井上さんの頭腦の閃きも決して故なしでは無かつたわけである。先覚者の素質を備へた人であつた。先覚者といふものは往々にして時代に容れられない事がよくあるものだが、井上さんもその例に洩れず、つい晩年までその処を得ずして不遇に終わられたといふことはまことに悲劇的であつたといわなければならぬ。井上さんに対する世上の誤解と悪評は、結局井上さんの真徳を理解できなかつた人達の妄言であつた。しかもその悪評を放つ連中が、その実、往年井上さんの全盛時代の取巻き連中だつたり、或は物質的に恩恵を受けた者ばかりであることは全くおかしきことである。筆者は、その実例を多く知つて居り、又、事実の内容もよくわしく知つて居るのであるが、若し筆者がその事実を発表すれば、井上さんを非難している連中の中、顔を赤らめず居られる人が

何人居るであらう。又井上さんの先覚者的予言が事毎に幾年か後に実現している現在の新潟市の有様を見ても、今更その研えた頭腦の閃きに驚嘆せざるを得ないのである。その大なるものは、新潟問題などもその一つである。井上さんにして、何か挽回のところがあつたのであろうか、何れにしても新潟問題に就ては、今の新潟市に於けるべき事は早くより唱えていた人である。情けない哉新潟市の中に井上さんに与えるべく一つの椅子もなく又容れるべき一つの部署すら無かつたという事は、智力識見に於ては、井上さんに及ばぬ輩から執ように敬遠されたということでは無かつたらうか。この思い出の人も、晩年は不遇に陥つた様であるが、心ある人々は井上さんの才能を惜んで時折り追憶談をするところもあるが、それもだんだん忘れられ勝ちになるのは世の常といふ言え、まことに淋しい限りである。

三堀謙二君追悼座談会

而立会



故三堀謙二君

昭和四十一年一月十六日（日曜）午後六時八時 新潟市東区六番町 和幸ビル八階

出席者 阿部 功 阿部 七治 渡辺浩太郎 奥田省三 片桐 助良 曾我八洲男 河路貞夫 遠藤種雄 吉田義隆 小林英 弥 猪俣義明 中林東平 伊藤敬太郎 田村真美男 (司会) 山下隆吉

○とき 昭和四十一年一月十六日（日曜）午後六時八時

○ところ 新潟市東区六番町 和幸ビル八階

○出席者 阿部 功 阿部 七治 渡辺浩太郎 奥田省三 片桐 助良 曾我八洲男 河路貞夫 遠藤種雄 吉田義隆 小林英 弥 猪俣義明 中林東平 伊藤敬太郎 田村真美男 (司会) 山下隆吉

○とき 昭和四十一年一月十六日（日曜）午後六時八時

○ところ 新潟市東区六番町 和幸ビル八階

○出席者 阿部 功 阿部 七治 渡辺浩太郎 奥田省三 片桐 助良 曾我八洲男 河路貞夫 遠藤種雄 吉田義隆 小林英 弥 猪俣義明 中林東平 伊藤敬太郎 田村真美男 (司会) 山下隆吉

のである。その三堀先生が、権門に媚びず名利に走らず、接する者すべてを感化し心服せしむるといふ名校長になつてわれわれは二度びつくりしたのである。だが天はこの好漢に時をかきざり旧臘十一月二十七日六十七才を一期として年余の斗病生活を丹記子未亡人の手篤い看護をうけて他界したが、いまわのきわに言い残した遺言は「和」であつた。次に「長幼序あり」と言つて後は「たがが味は味う程度味深長な、彼ららしい遺言であつたと、今更の如く感心しているのである。A—事件の起きた時は、河路君が二年乙組の級長をしていた夏だつた事を記憶している。大正八年六、七月頃であつた。B—その晩三堀は自宅に居なかつた。二、三日前から今成弁護士事務所に北村太市君、ほか二君と一軒借りて自炊していた家に泊りこんでいたが、その晩十時ころ、三堀は家に物をとり帰つたところ、自分の家に泥棒がはいつており、隣家の源川君が警察に訴えに行き、刑事を連れて来たが、犯人は片桐太郎という前科何犯かのしたたか者で、真暗な家の中

に抜刀して潜んでいるのを、勇敢にあつたか、授業中であつたか、とにかくアタカメレオン先生（後日大原村長になつた樋口先生）は不在であつた。悪童の双壁三堀と湊元が尻は燃えという実験を皆んなにご披露する事になつた。湊元は適当なしるものがあつたためか、失敗したが、三堀は見事に成功して尻は猿股の上方に青い炎をあげて燃え拍手を浴びた。それから程なく入つて来たカメレオン先生はニヤニヤして「化学精神の旺盛はいいが、今後はその実験は罷りならん」と云つて褒めながら叱つたと伝えられている。E—これは三堀が股られた話であるが、寒い日の中で煙草を囲んで数人があつた。そこへ落第生の三堀がやつて来て、いつもの通り皆んなを押しつけてまん中であつたらうとした。するとあつた。原大木林という無口で、変人でもポケットに手をつっこんで味味の悪い男が三堀を殴りつけた。三堀は左頬から血を流した。原の右手には肥後守（小刀）が握られていた。その後三堀は何人も先生からその傷について尋ねられたが、「ちよつとけつした針金で傷つけた」と軽く答えていた。そしてその後三堀は皆のいる前で原に「俺が悪かつた」と言つてあやまつた。三堀はそういう男であつた。

(註) 原君は新潟大学医学部を卒業したが惜しくも夭折した。

F—暑い日であつたが、「三堀がポケットに蛇をもっているから気をつけれ」と誰かが注意してくれ出したら入れて置いた。先生が白黒をとらうと何気なしに引き出しを引いたら蛇がとび出して先生が悲鳴を挙げたとか挙げなかつたとか聞いたが真偽の程は分らない。G—これも真偽不明の三堀逸話伝説であるが、三堀校長が廊下を歩いて曲角に近づいた時、三堀が曲角の向うから走つて来て、校長をびつくり返してしまつた。この三堀は、三日間の停学謹慎処分を受けたとか、受けなかつたとかいふ話である。司会者—三堀君の悪名高い逸話ばかり出ましたが、校長になるまでの感心な話を誰かして下さい。O—三堀君がどのようにして校長になつたかについては、出席者の中に知っている者はいなかった。一緒に暮らした小学校の先生なら知つて居る筈だといふ事になつたが、それとも令夫人のかじり取り方が巧みだつたかといふ話も出た。H—だが三堀君から「人生は積み重ねだ」といふのを何度か聞いたので教える立場となつたと彼は大悟一番、彼のいわゆる積み重ねによって自らを練成したのもと思はれる。彼が教師になつてから勉強したか、しなかつたかは吾々は知らないが、兎に角彼はよく練れた名校長になつた。

I—見上げなくがらつぱち綿密な計画と先見の明があつた。そしてたくましい実行力は彼の特技であつた。

J—彼は人と話し合うのに無責任な事は言わなかつた。言つた事はどんな難事もやり通す誠実さがあつた。この点一本筋金の通つて居る男であつた。彼の毒舌は有名であるが所と時をよく考へてものを言ひ、人の心を辛辣に抉る事が巧みであつた。

K—三堀という男は交れば交るほど滋味のある男であつた。流くつて情熱があつてポイントをつかむに妙を得ている校長であつた。権威に媚びず世世におもねらない実践者であつた。

(編集部註) 右は而立会々報に載つた追憶座談会の記事を、請うて、抜粋転記させていただきます。而立会は三十回を中心とする同窓の親睦団体です。



若い東京青山同窓会の発足

五八回 福田 満

最近母校のことが新聞や雑誌にのびのびと、〇〇大学に何人、××大学に何人という進歩一覽表くらいで、およそ若人の血を湧かす甲子園や全国大会等にはさっぱり名前が出ないのは、私自身スポーツをやったので特にそう感じるのかもしれないが、故郷を離れて母校を想うとき矢張り一沫の淋しさを禁じ得ない。

日頃の許にスポーツ関係の先輩や後輩が何かにつけてよく集るが、我々の前後二、四年という学年は終戦後、学制改革のどくさで中学高校を通じて六年間の交遊による横の連絡は極めてよい。そのため兎角商業に比べて団結の弱さをうんぬんされる青山同窓会の中でも一番長くまとまっているのではないかと。又旧制中学と新制高校の云々も存在に於けるので、今回も同級の北井一郎(舞踊研究所長)、関根太郎(弁護士)の両君と相談し、先づ本年一月二十六日最初の会合を池袋で行なう。三条昭典君(大光相互銀行五三回)の肝煎りで五二回から六六回までの中木田明君(大矢根建築設計事務所五二回)外二四名が集った。

名簿編纂にあたって

五五回 中村幹男

「イヤホンネ、マイッタテ」これが現在の私の偽らざる心境である。名簿作成を丸善の出版業務を任せているからと威嚇よく引受けてみたものの、まさかこんなに手数がかかるとはツイ知らず、全く閉口しました。然し手掛けている間にだんだんと怒が出て、出来る限り完全なものにしようと思つて、年中ととうとう六月になってしまひ、名簿を心待ちしていた諸兄弟に大変な迷惑をおかけすることになった。

この名簿は各先生始め委員、先輩の方々が個人の負担でいろいろお骨折りをされたもので、技術的には出来上ったもので、技術的には前の索引及び目次がないこと、アイウエオ順に並べてないこと、又誤植があることなど完全でない点が多々ありますが、それは次回の問題として、兎に角一銭もない中から皆様の尽力で始めてこれだけのものが出来たことを喜んで戴きたいと思つて、もつと時間をかけてやればより完全な資料を集められたと思いますが、何しろ三月二十六日新潟県人会館での初の会

合から二ヶ月間経過し、その時配布した校正中の名簿には掲載人員は二〇〇名であったのに対し、今回発行の名簿には約六〇〇名の会員を掲載することが出来た。一応原稿を打き送り発行に踏切りました。そして今回は出来る限り無料で配布しようとする目的で作成したので、皆様に広告が寄附まで大変お世話になり、殊に沢山先生と各委員の諸兄には原稿の督促などで熱心に奔走して下さったことを深く感謝いたします。この名簿が会員相互の親睦のために有益に使用されますことを願うと共に青陵健児の結集と意気昂揚に役立つことを念じております。

〇〇回のお蔭である。

市役所支部 総会の記

幹事 池田

四十二年二月九日午後六時半、大和百貨店食堂特別室にて開催。本部より阿部藤策副会長、斎藤希式幹事長を招き、出席は名譽支部長渡辺市長以下七十四名。

市長は挨拶に、最近の新潟市に於て吉凶相次ぐ歴史的な重大事であった新潟県と新潟地震に際して寝食を忘れる努力と励精を重ねて市民の期待に応えたいと、職員員の労苦に感謝し、特にその中核である支部会員の労を痛めた。阿部前会長は血は水よりも濃い同窓の絆は、派閥意識を超越して仕事の上でプラスする連帯感であることを強調された。

出席全員の自己紹介、有志の所感があつて、退職した斎藤申吾前土木部長の後任支部長に尾玉賢雄現水道局長を選出、懇親会に移る。尚、当支部委員は現在一〇二名。

- 役員
- 委員長 佐々木良明 (50)
 - 副委員長 北井一郎 (58)
 - 上原 明 (62)
 - 倉品省三 (63)
 - 岡本耕治 (51)
 - 小柳俊一 (53)
 - 中村幹男 (55)
 - 福田 満 (58)
 - 金山常吉 (60)
 - 小林元雄 (61)
 - 堀口忠五 (62)
 - 樋口英雄 (66)
 - 三条昭典 (53)
 - 捧 精一郎 (66)
- 会計委員 三 捧 精一郎 (66)

三八回の総会 開催(第三六回)

幹事 渡辺義平

三八回(新潟中学第三八期生同窓会)の諸兄が昭和六年、或は昭和五年、懐しの青山を去つてから三十五年目の昭和四十一年二月六日、三十六回目の会合を田中旅館(田中松一氏経営)で開催した。会場は村上、柏崎、直江津、遠くは東京からも万障差し繰り進んで参加された。

母校と三八会の隆盛を乾杯しながら、母校のグラウンドで、裏山で異人池々々で、或時は喜びに浸り或時は悲憤に暮れた往時の事など語り合ひつつ、お互いの現況に言葉や交わし、つきない飲談のうちに、往年の応援団長田巻二郎氏の音頭で青山の応援歌に、手を振り腰を伸ばして元気一杯合唱、お互いの健康と精進を誓ひ、名残りを惜しみ、又逢う日を約して午後九時散会した。

席上幹事より配布された青山同窓会報第三号の母校、恩師、旧友の音信や、難航する青陵校名問題の記事に懐旧談、憤慨論述、幹事は総会の収拾に「苦勞」といふ場面もあつたがこれも昔の悪童のこゝろ、あきらめた次第です。

故歌川京造先生

職員 岩野祐吉

ブルの愛称で青陵健児に敬愛された歌川京造先生が桜の咲くに先きだつて亡くなりました。あんなに頑健だったのにと思うが、若い頃心臓が弱く、体操の巨漢さん「あなたは長生きできない」と言われ、ひそかに警戒しておられたのだが、遂にそれが原因で他界された。「ブルも老いては駄目な劣る」と、ユーモアたっぷり昨年の同級会で挨拶されたのに。

歌川先生は北魚沼郡田川村の出身、十九才で小学校教員検定試験に合格、その後独学で数学教員の資格を得られた。文字どおりの苦学力行の実践者だった。

大正十三年三月、新発田中学校から転任、爾來二十有余年の間、数学の授業を通して青陵健児の育成に専念された。数学さえ教えているなら地位も名譽も金もいらないうという楽しみぶりだった。教え方もうまく「ブルの数学はよくわかつたぞ」と語り草にする。

学徒動員に当つては、名古屋の愛知航空との間を九回も往復されて頑迷な軍と会社を相手に奮闘された。引き揚げに際し、一人の死者も負傷者も出なかつたことに安堵し、満足されたという。歌川先生のもつとも生きがいを感じられた時ではなかつたかと思う。その功績が認められて、小千谷高等女学校長に栄転された。再起を望めなくなったことに感づかれ、「自分の生涯中、一番楽しかったのは、二十余年の新中生活である。ぜひ、何かの礼をしたい」と、懐かしうに昔を思い出して枕頭の奥様に語られたと言ふ。

四月十一日、嗣子正博氏(理学博士)日立研究所主任を伴つて奥様が学校を訪ねられ、亡夫の遺志として金十萬円と、貴重な蔵書百四十冊を寄贈された。学校では利用率の高い百科辞典を購入し、蔵書は歌川文庫として芳志を長く伝えることにした。

同窓会には必ず顔を覚えていられたのに、今年の総会に淋しい。深く先生の哀福をお祈りしたい。なお、奥様は当分護国神社傍のお宅にお越しのこと。

職員 志田耕吉

一つの願い

四年程前の某日某時の国語の時間でした。相手は受験線に立っている、否立たせられている三年生です。科目は文学史で、江戸歌舞伎も終りの河竹黙阿弥の頃になりました。折しも外部からの授業参観者があり、数名のかが教室の後におられました。話が進んで白浪五人男に入った時、よせばよいのに教師は声色を一席やつて、ご機嫌を伺つたものです。

「さてどんじりに控えは、潮風あらしきゆるぎの磯馴れの松の曲りなり、人となつたる浜音ち」トントン進んで「念仏ざれえの南郷力丸」と唄得を切つたその瞬間大向うから声がかかりました。「ご存知は屋敷です」これで一同ドツと来て、参観者のあきれ顔のうち「幕となりました。無帽の生徒をつかまえて、なぜ帽子をかぶらんのだ。當習犯だぞ。教務

「はてな」と首をひねると「いやひねらぬうちに」すかさず生徒は「先生、解答はこれこれだと書いてあるのです。僕にはどうしてそんなのかわからないのです。本当にそれでいいのでしょうか。いいのなら、どうしてそんなのかわからないのですか、それを聞きたいのです」そこで教師は俄然返つて、「それは君、そうだよ。うんそうなんだ。理由か？ 理由は、それこそこのところこう書いてあるだろう。ここが鍵だね」いや今の生徒諸君は紳士淑女です。ちゃんと教師の難儀を救ってください。

これに似た師弟愛談は、校内にいくらでもころがっているはずだ。従つて「なぜ帽子をかぶらん」といえば、「昨日学校へ忘れ帰りました。すみません」とも言い「けさ遅れそうになつてあわてて、かぶらずに来ました。これから気をつけます」とも答え、とにかく適当な理由を並べ、教師の感情をもうたつて、スィスイと行つてしまふ。野暮な理屈でこねることなど、とんといたしません。まことにありがたい御時勢となりました。ですがこれで喜んでいいとばかりは言いきれないように思うのは、僕一人の天の邪鬼の見解でしょうか。険しい人生の有名校殺到を先ず取り上げ、その次には一流校にはノイローゼがいてることを書き立て、それから利己的な競争意識に駆られてる高校生を登場させる。これがきまつた型になつてはいる様ですが、こういうルポや、キャンペーンを、あつちの新聞、こつちの週刊誌で見ているうちに、有名校とはそういうものだ、概念が読者の頭の中に固定化してしまふ書き立てますし、単行本もたくさん出しています。にもかかわらず、非行青少年は増加しています。又一方では、反対に益我の松の如く枝ぶりは見事ながら小さく固まつてしまつて、大きく伸びるエネルギーを失つてしまつたような、手入の行き届きすぎた、少年も見かけます。親が自然に、平凡に、まじめに、そして何かを求めて真剣に生きていけるなら、子供はそれなりにまっすぐに育っていくのではないのでしょうか。本当の家庭教育が不在だからこそ、家庭教育論が流行するともいえるような気がしません。しかし、一方では、まだ十分に望みは持てるという思いもします。それは青陵問題が起きた時の本校生徒会の激しい活動の中に、平素秘められていた生徒の若しい情熱を見る思いがしたからです。また一年一回の青陵祭で発揮される生徒たちのエネルギーの活躍ぶりには、目を見張る思いのすることも事実です。

ただ、それが集団—それ自体がすでに一つの力です—という場の中になし、個人の、真にひとりとしての心の強さが、ひとりとしての心の中に、どつしりと根を下ろしてほしい。それが僕の心からの願いなのです。